

一般人のオープンアクセスに対する関心

数間 裕紀

オープンアクセスとは学術成果を誰でも無料で利用できるようにオンライン上にアップロードすることである。オープンアクセスには「(1)学術情報流通の世界の変革」、「(2)研究資金の使途を公にするための手段」、「(3)学術機関の成果の一般社会への還元」という3つの社会的意義があると考えられる。このうち、(2)と(3)の2つは研究者ではない一般人を対象とした社会的意義である。しかし一般人を対象としたオープンアクセスの研究はほとんど存在しない。このため一般人に対するオープンアクセスの普及状況や、一般人がオープンアクセスにどのようなことを希望しているのかという情報は明らかではない。

本研究の目的は一般人に対するオープンアクセスの普及状況(認知度・利用度)と、一般人を対象としたオープンアクセスの必要性を明らかにすることである。また一般人の学問分野の関心にも焦点を当て、これからのオープンアクセスの方針についても検討する。

調査方法として株式会社マクロミルが取り扱うインターネット調査を採用した。調査対象者は20歳以上の社会人800人である。調査対象者にオープンアクセスの認知度と利用度、オープンアクセスは役に立つと思うかどうか及びその理由、興味を抱く学問分野について尋ねた。

調査の結果、回答者のオープンアクセスの認知度は16.4%、利用度は11.6%と低い値である一方で、オープンアクセスを役に立つと考えている者が55.1%と高い値であることがわかった。オープンアクセスの認知度は大学卒業者が20.6%、大学院修士修了者が31.7%というように最終学歴が上がるほど高くなる。またオープンアクセスを実際に利用したことがある者の84.9%がオープンアクセスを役に立つと考えている。

一般人が興味を抱く学問分野は性別によって異なる。女性は心理学、医学、教育学に興味を示し、男性は情報学、工学、経済学に興味を示す傾向が強い。環境学と天文学は男女ともに関心を抱いていた。また医療従事者は医学に、教育関係者は教育学に関心を示している。一般人全体の傾向として基礎科学への関心が薄く、応用科学への関心が強い。研究者と一般人のオープンアクセス政策は分けて考える必要がある。

一般人のオープンアクセスに対する関心は「(2)研究資金の使途を公にするための手段」よりも「(3)学術機関の成果の一般社会への還元」に向いている。日本の機関リポジトリには大量のコンテンツが収録されており、大半は紀要論文である。「(3)学術機関の成果の一般社会への還元」のためには機関リポジトリのコンテンツの充実が不可欠であり、種類を問わずさらなる学術論文の搭載が必要である。特に一般人から需要の多い医学や心理学の分野の充実を図ることはオープンアクセスの普及に役立つと考えられる。

(指導教員 逸村裕)